

「生活の場」から「人材育成の場」まで——進化する「寮」の目指すもの

●特集 多文化共生の「寮」をデザインする

——APハウスの未来(立命館アジア太平洋大学)

今村 正治 ●立命館アジア太平洋大学副学長

一 はじめに

二〇〇〇年に設立された立命館アジア太平洋大学(APU)は、理念として「自由・平和・ヒューマニズム」「国際相互理解」「アジア太平洋の未来創造」を掲げ、大学づくりの目標を「三つの五〇」(学生の半分が国際学生、国・地域の数は五〇、教員の半分が外国籍)とした。これらは開学ほどなく達成され、学生の出身国・地域は、近年約八〇、累積では一三〇を超えている。この多文化環境こそ、APUの教育研究にとってまさに宝であるが、これを可能にしたのは、APUの言語システムと寮、APハウスの存在であると言える。言語システムとしては、日本語と英語の二言語をキャンパス公用語とし、国際学生は入学時には基準言語として日本語または英語を選択することができる。つまり英語を基準言語として選択した学生は、入学後に英語で専門科目を履修し、必修で日本語を学ぶのである。英語基準選択率は、開学

時には約七〇%、現在は実に約九〇%になっている。

日本語ができない、日本での生活経験が初めてという多くの国際学生の入学を促進するためには、寮は開学と同時に必要不可欠であった。しかし、APハウスの開設準備から今日までの歩みは、まさに「壮大な実験」としての国際大学を象徴する「前例のない」ものであった。またAPUの発展とともに、APハウスもその役割を変容させてきた。

本稿では、APUの「揺りかご」、APハウスの歴史的変遷を振り返りつつ、さらに多文化共生寮としての将来の可能性についても言及してみたい。

二 APUの発展とともに——APハウスの変遷

・第一期(二〇〇〇年四月) APハウス1

開学と同時に完成をみたAPハウスの居室は四二五室である。この数は、当時の国際学生の定員に対応している。一年の入寮期間の間に、日本語能力を上達させ、日本の市民生活



	APハウス1	APハウス2	APハウス3
室数	シングルタイプ425室 シェアタイプ 189室 セミナーハウス (個室2室、8人部屋2室)	シングルタイプ477室 シェアタイプ 189室 大学院生 30室 セミナーハウス (個室2室、8人部屋12室)	シングルタイプ 232室 シェアタイプ 88室
延べ床面積	15,527.39㎡	18,499.57㎡	7,750.48㎡
家賃(月額)	国内学生49,000円 国際学生39,000円	国内学生49,000円 国際学生39,000円	シングルタイプ28,000円 シェアタイプ22,000円
竣工	2000年4月 (2007年4月増設)	2001年9月 (2007年4月増設)	2003年4月 (2006年4月増設)

への適応力を養うことを目的としていた。立命館にとつて経験のない巨大な国際寮建設は、施設、管理運営全般にわたつて、山積した課題を一つずつ解決していかなければならなかった。施設については、関係者による研究会を重ね、さまざまな工夫を凝らすことができた。管理運営については、規模から考えて「住み込み寮母」を置くことは困難と判断し、RA(レジデントアシスタント)と学生部と管理業者による「三位一体」の体制を考案した。しかし、管理運営は多くの難題や未知の問題を内包したままの出発となり、まさに怒濤の草創期となった。

・第二期(二〇〇一年九月～)

APハウス2

二〇〇二年からの大学院設置に備えて構想され、五〇七室を有するAPハウス2を建設した。入寮者は、国際学生の学部一回路生、大学院生を中心としつつ、交換留学生の受け入れなど入寮対象の広がりが見られるようになった。

・第三期(二〇〇三年四月～二〇〇六年四月) APハウス3

二〇〇三年四月、国際学生の

市中における住居不足解決を主な課題として、学校法人立命館の子会社クレオテックが、キャンパス外にクレオハイツを建設した。さらに二〇〇六年四月に学生定員規模拡大に伴い増設を行い、居室は三三〇室となった。二〇〇九年学校法人立命館がクレオハイツを買い取り、APハウス3となる。

・第四期(二〇〇七年四月～)

もともとは英語基準が圧倒的多数の新入生を受け入れることを目的に建設されたAPハウスだったが、徐々にその役割を拡大してきていた。そして、RAの国内学生の著しい成長ぶりに着目することで、国内学生と国際学生との共同生活を通じた国際教育寮という新しいテーマが浮上した。そして、国際学生と国内学生がペアになって開け閉め自由の敷戸を境に生活するという新しい寮空間を設計した。このことにより、APハウス1・2に三七八室を増設し、居室は全部で一六三〇室(オンキャンパス一三一〇室)となった。

三 APハウスの現況とマネジメント

(一) APハウスの現況

キャンパス内にあるAPハウスは、成立の経過からも明らかにように、国際学生の入学後一年間のみの居住を原則としてすべてのシステムを組み立てている。これはもちろん、在学中の入寮を保証すれば今の何倍もの寮が必要となるということもあるが、一年間の日本語、日本の生活文化の学習を踏

まえて、むしろ積極的に国際学生に市内に住んでもらい、市民との交流も行うべきだという考えが初期からあった。

APハウスができて一四年、新入生の受け入れを大前提としつつも、居室のコントロールには苦労が多い。APUは春秋の年二回入学なので、国内学生・国際学生の入学状況によって必要居室数変動することがあり、それに加えて交換留学やその他学外からの臨時的受け入れに対応するために、APハウスの平均入居率は約八〇%を基本にしている。約一〇〇名の学生の入寮者のうち七〇%が国際学生である。また新入生の比率は、国内・国際合わせて約七〇%となっている。

男女の居住形態をどうするかについては開学前にはずいぶんと議論になったが、全室が個室であり、各フロアに設置したシャワーブースも完全に個室形式にしたので、結局、同一フロアにおける混住を基本とした。ただし、一階については安全上の配慮から男子専用、五階については宗教上の理由などから混住を希望しない学生に対応して女子専用とした。

その他、経験の積み上げにより確立されてきているルールがある。常時八〇カ国・地域の学生が居住する多文化共生の寮だからこそ、ルールのあり方は極めて重要である。がんばりがためのルールや厳罰の多用によって、せっかくの環境を押しさえつけないようにしながら、寮生の快適な生活、学習と健全な交流を保証するためのルールをしっかりと守らせることも重要である。そのいくつかを述べると、アルコールは居室内に限定、喫煙は全学の禁煙の取り組みによって屋外

APハウスでの料理大会



の喫煙所のみ許可（屋内喫煙は退寮措置）、寮生以外の立ち入りは午前八時から午後一〇時までで宿泊は禁止などである。なお、キャンパス外にあるAPハウス3は、二回生以上の寮として運用している。

(二) APハウスのマネジメント

後述するように、学生が主体の運営を実現しているAPハウスだが、もちろん学生だけで寮が運営できるわけではない。大学が責任をもって管理運営に関わっていることは言うまでもない。スチューデントオフィスの一部として、オフィスを寮内に配置している。六、七名の職員を置き、学生同士では難しい寮生の指導、一年単位で入れ替わるRAや寮生を補完する寮運営の継続性の支援などを担っている。また、ハウスオフィスは、ハウス主催の教育プログラムも運営している。日本（大分）の産業や

商業、文化について理解を深める「フィールド・トリップ」、京都・立命館大学の国際平和ミュージアムや長崎を訪問する「ピース・ツアー」、地元の市民と日本舞踊や書道を体験したり、多国籍料理を作ったりする「地域交流プログラム」などを実施している。

日勤四名・夜勤六名の管理人は、施設備品の管理、入館管理、巡回、緊急時初期対応などを担っている。寮費管理、施設の保守警備、清掃業務などは委託している。

四 レジデントアシスタント(RA)の活動

次に、APハウスを象徴する学生スタッフのレジデントアシスタント(RA)について触れたい。

(一) RAの活躍なしに寮は成立しない

現在、六四名を数えるRAは、二名で三三〇五六名の寮生がいる各フロアを担当している。毎セメスターごとに、八〇名ほどの希望者から三〇名程度を選抜している。つまりセメスターごとに半分が入れ替わっていることになる。またRAの活動前には一週間の研修を実施しており、APハウスオフィスとRAのリーダーによって企画されている。

RAは、①国際学生に安心・快適な住環境を提供すること、②別府市内での居住に適応できるルールやマナーを身につけさせること、③多国籍・多文化環境に適応する能力を身につけさせることで、極めて大きな役割を担っている。ごみの分

別、禁煙、飲酒、料理、寮費納入などの各種ルール指導や、勉強・生活から恋愛までのよろず相談対応のほかに、フロアの寮生の交流を促進するためのさまざまなイベントを企画することなど、RAなしに寮の生活は成り立たないのである。

企画は多種多様に展開されている。フロア単位企画では、ウエルカムパーティ、大掃除大会、スポーツ大会、料理イベントなどが行われている。また、H A Oという学生チームは、新寮生買い物ツアーや七夕イベント、もちつき大会などAPハウス全体のイベントを企画している。さらにAPハウス寮祭「世界祭」は、RA以外からフロアごとにリーダーを選出し、フロアごとのダンスなどのパフォーマンスイベントを開催している。

こうした濃密な交流の中でも、RAには、料理イベントでは宗教上の配慮を怠らず、出身国・地域が関わるセンチティブな問題が話題になるときはそれぞれの立場を尊重するように努め、ワールドカップなどのスポーツイベントでは精一杯応援するが試合が終われば、みんなで風呂に入ってリセットするなど、多文化の中で共に生活するためのきめの細かい対応能力が求められる。まさにRAは、自身の経験を踏まえ、工夫・ルールを寮生自らがつくりだせるように導く存在となっている。国・地域、文化の違いによる価値観のあまりの違い、その中でルールをどう守らせるか、注意文書やオリエンテーションで説明しても効果が薄い。これは開設以来のRAの最大の悩みであった。そこから生み出されたのが、新入生

新入生のAPハウス入室式にて流す、
RAが毎セメスターごとに作成しているビデオ



歓迎イベントで上映される

「ダメダメ・ビデオ」である。RAが自ら演出・出演し、APハウス内での絶対にしてはいけないいきまわりを楽しく紹介している。今年はミュージカル風に仕上げて、新入生の喝采を浴びたそうである。

(二) RAはAPU学生のロールモデル

こうしたRAは、当然ながら極めて忙しい日々を送っている。RAには月額二万円の奨学金を給付しているが、RAにかかる時間数だけで言えば、とても割に合うものではない。しかし、RAが忙しく

大変ながらも、後輩を支援することで成長し、充実した日々を送る姿を見て、いつか自分もそのような存在になりたいと思うようになる寮生も多い。まさに、APU学生のロールモデル、寮生の身近で頼もしい存在としてRAの「ピア・サポート」効果は、極めて高い。継承されていくRAが、APハウスの歴史と文化をつくり、今の到達点を築いていると言え

五 APハウス 近年の特徴と課題

(一) 国内学生の入室希望が増加

国際学生の新生は原則全員が一年間入室するが、国内学生は希望者の中から選抜することになっている。入試の出願時に希望を募り、合格発表時に入居の可否を通知する。合格者の約八〇％がAPハウス入室を希望し、入室希望の約半数が入室を許可される。現在、寮生の中で約三〇％を占めている国内学生の入居希望は年々増加している。APUを志願する層は、もともとさまざまな異文化体験をしたいという志向性が強いと考えられる。国際的環境の豊かな国内大学が多数存在する中において、APハウスの存在は大学選択に関わるAPUの特徴となつてきていると言えよう。しかし、国内学生がAPハウスを言語学習や異文化経験のマジックワールドと思ひ込み、安易な環境依存に陥ることのないよう、寮生活における学びをプログラムとしてしっかり確立する、このことが今の大きなAPUの課題である。

(二) 社会からのニーズの高まり

APハウスは学生寮であり、APUの学生が居住するための施設である。しかし、APハウスで展開してきた多文化環境とそのハウス文化がもつ「教育力」が、企業や小・中・高校から注目を浴びつつある。

その一つが、企業のグローバル人材育成研修のニーズであ

る。APUでは、ビジネススクールの英語による授業を受講しつつ、APハウスに居住してさまざまな国籍の学生とも交流するという企業向け研修プログラムを開発した。クォーター制を採用しているAPUでは、二カ月で完結するプログラムとなり、企業も派遣しやすく、海外赴任前の研修として活用している企業も多い。ほとんどの赴任先の国・地域の学生はAPUに在籍しているので、そうした学生がボランティアパディとして、英語や現地の言語、文化・習慣などの学習サポートをしている。また、日本企業の海外支店の現地従業員を研修生として受け入れ、日本語の教育を行うプログラムも、昨年から一〇カ月の期間で実施している。

もう一つが、APハウスを活用した実践的英語体験、及び多様な国・地域出身の国際学生との交流・異文化体験プログラムを行ってほしいという小・中・高校からの要望である。多くは九州の学校だが、関西地域からの希望もある。

こうしたニーズにはできるかぎり対応したいが、APハウスの受け入れ能力に限界があり、十分に応えきれていないのが現状である。

六 多文化共生寮としての未来

APハウスは、国際学生のために開設されたものであったが、やがてそれは、国際交流寮、国際教育寮としての役割を担うことになった。APハウスは、学生のアイデンティティ

の形成に大きな影響を与え、彼らの成長の拠点となっていたのである。もはやAPハウスなしに、APUにおける学びを語ることはできないと言っても過言ではない。

そして、近年は国内学生の入寮への希望が増加しており、首都圏などから受験生がAPUを目指す大きな魅力となっている。将来的には、国際学生、国内学生全体を対象とした初年次教育に、寮における学びを大胆に取り入れ展開するため、居室のさらなる拡充も検討のテーマとなろう。そのためには、八〇に及ぶ国・地域の学生の共同生活を通した学びについて、広く専門家などに意見を求め、より生きたあり方、プログラムを検討していく必要がある。

また、近年取り組まれているAPハウスを活用した企業人の研修も、今後、アジア・太平洋地域、中東・アフリカ地域などで、働ける企業人材を育成するうえで多くの期待を受けている。今後、企業のニーズに対応したプログラムの開発にとりくんでいきたい。

APUは、二〇二〇年から二〇三〇年への歩みの中で、圧倒的な多国籍・多文化環境のもとで、授業・自主活動・寮生活などあらゆる経験を学生の成長の機会とし、国内外のステークホルダー（卒業生・企業など）の参画により、世界トップレベルのグローバルラーニングを構築したいと考えている。そしてAPU独自の学びを子どもたちや社会人にも広く開放していきたい。成長の「揺りかご」としてのAPハウスの役割は、ますます大きくなるものと思われる。

「生活の場」から「人材育成の場」まで——進化する「寮」の目指すもの

●特集 引き継がれる自治の精神

古沢 希代子 ●東京女子大学現代教養学部教授、学生委員長

一 はじめに

東京女子大学の三つの学寮（茜寮、北寮、楓寮）は、正門から反対側の樹木に囲まれた一角にある。そこは、キャンパスの中にありながら、寮生以外あまり立ち入らない案外と知られざるエリアである。かきう筆者も、職責に関わることでありながら、また、本学の卒業生でありながら、さらに、これまで多くのゼミ生がお世話になってきたにもかかわらず、本学の学寮が「教育寮・自治寮」としてどのように運営されているのか、その内実を十分に理解していたとは言えなかった。本特集への寄稿が好機となり、今回、一つの寮（楓寮）に体験宿泊をお願いし、また、三寮の正副寮生委員長及びその経験者から話を聞かせてもらうこととなった。

二 学寮の歴史

本学は一九一八年に角筈（新宿）で発足し、一九二四年に当時井荻村と呼ばれた現在の杉並区善福寺に移転した。その際に開設されたのが「東西寮」である。

米国人建築家アントニン・レーモンドの設計による「東西寮」は、高い煙突のある厨房施設を中心に東西に分かれる二階建ての建物である。居室部分は南面の中央を玄関として、各々中庭を囲んで四角に建ち、北側中央には上下階にパラ（談話室）があった。共用部分としては、中央部につながる部分の一階に、集會室、委員室などを擁していた。何よりの特徴は、一九〇の居室が女子寮として日本初の一人部屋だったことである。それは新渡戸稲造初代学長の教育理念を体





現している。

新渡戸は、「学生は一個の人格として、一日に一度はただひとりになって祈り、瞑想する時を持つことが必要である」と語っていた。彼は当初、全寮制の構想を抱いていたという

（東京女子大学東西寮六〇年―一九八三年）。

現在の三寮は寮生自身によって運営されているが、寮生自治のルーツはこの「東西寮」にあり、ここから寮生自治への苦闘がスタートした。戦

前の軍事体制も戦後の反安保闘争も見つめてきた「東西寮」は、一九八三年、老朽化によって閉寮となったが、一人部屋への伝統は、一九八四年にスタートした「楓寮」に受け継がれている。

一方、戦後の学生増に対処するために建設されたのが二人部屋の「茜寮」（一九六〇年〜）と「北寮」（一九六四年〜）である。二人部屋では上級生と下級生が組むので、大学生活について上級生からいろいろ教えてもらえる。また、かつて短期大学部があり、その閉鎖後に現代文化学部（一九六〇年）が開設された牟礼校地には「椿寮」（一九六七〜二〇〇三年）が存在した。

現在の学寮は、三寮ともに各階に共同キッチンが設置され、土日及び必要に応じた自炊が可能になっており、パーラーと呼ばれる談話室や図書室がある。現在、朝夕の食事は学生食堂で提供されているが、以前の食堂スペースは、多目的ホールとして、寮生大会や各種部会の会合、また、自習、楽器の演奏、語らいの場として利用されている。

三 学寮の理念

本学の学寮は単なる宿舍ではなく、共同生活を通して人間形成を行う教育寮として設置されている。在寮期間は原則と

して四年間である。各寮では、寮監が寮生と起居を共にして、助言を与えている。学寮は、寮生から選ばれた寮生委員会を中心に自主的に運営されている。学寮には、新歓パーティ、七夕会をはじめ楽しい催しがたくさん企画されているが、しかしもう一方で、共同生活を送るためにルールや当番があり、寮生には自覚と責任ある態度が求められる（大学公式HP参照）。

ここで強調したいのは、学寮の理念も運営方法も寮生自身がつくってきたということである。例えば、学寮の理念は各寮の「寮生規約」の前文に掲げられており、東西寮からの伝統を継承している。

「私たち東京女子大学西寮生は、建学の精神に基づき、全寮生の自治と総意による共同生活を通じて、学生生活の充実をはかり、各自の人間形成に努めるものである。この目的にそって、寮生活の自治を円滑に行い秩序あるものとするために、次の規約を定める」（「西寮規約」一九七二年）

規約では、寮生活の運営のための機関である、寮生大会、委員会（正副委員長、会計委員、生活／衛生委員、書記／庶務委員、文化／企画委員など）、部会、そして、意思決定の手続きから寮監の配置と権限まで定められている。委員と委員が統括する部会の役割や名称は各寮で異なるため、二人部屋「北寮」を例に、その役割を紹介する。

立会演説会



- ・生活部 施設利用や備品の管理とごみの分別処理
- ・文化部 新聞代の徴収、非常時の指示
- ・庶務部 キーパー（入口の開閉、朝掃除の点呼、電話の取次、風呂のお湯入れ、風呂掃除の点呼、見回り）の管理

- ・会計部 月ごとの寮務費徴収、滞納者の管理
- ・衛生部 居室を除くすべての箇所の清掃の管理
- ・企画部 新歓パーティ、七夕会、ホームカミングパーティ、キ

風呂掃除



ヤロリング、フェアウェルパーティの開催
・炊事部 寮食の申し込みと寮食費の徴収の管理
その他、すべての寮においてルールや当番を守らなかつた者へのペナルティを定めて実行している。

寮の中心的執行機関である「委員会」は半期ごとに交代する。前ページの写真は、本年六月一八日の二三時に「楓寮」で開催された本年度後期の正副委員長及び各委員立候補者の立会演説会の模様である。投票は翌日に行われた。

学寮の「自治」は寮運営の経済的側面からも見る事ができる。

学寮の経常費（寮務費）は独立採算制をとっており、各月の支出額を寮生の数で割った額を寮生が払い込むことになっている。

宿泊体験して実感したのは、寮生がコストコンシャスであることだ。水道、ガス、電気の使用に対しては節約

が奨励されている。「葉だが金のかかる業務委託」に対して、自分たちで入口の開閉、公共スペース、トイレ、風呂場の清掃、ごみの分別や備品管理をすることが寮務費の圧縮につながっているのだと胸を張っている。また、洗濯機、冷蔵庫、電子レンジ、トースターといった共用家電の購入と維持管理も寮務費で賄われている。そのほかに、寮生は「寮舎費」を支払う。これは、寮のハード面（建物及び施設）の建設費と維持管理費に充当されている。

四 「寮生心得」

ちなみに本学の寮では、門限は二三時で事前の届け出があれば外泊は許可されている。だが無断外泊は禁止である。こうしたことも含め、寮生活の全ルールが各寮の「寮生心得」に定められている。例えば、「楓寮心得」は三三ページに及び、初めて目にしたときは「これを全部覚えるのか」と戸惑った。しかし、今回泊めてもらったあとは、すべてを覚えられないまでも、「そうか、こうしているのか」とうなずきながら読み通すことができた。つまり、人と生活を共にする際にはそれだけの調整項目が発生するということである。「寮生心得」は、生活に必要な役割分担や時間管理のほか、ペナルティ、掃除の手順、電話の受け答え方、エチケットにまで及ぶ。

各寮で励行されているエチケットをいくつか紹介しておく。
う。

各室のドアには居場所を示す「羅針盤」がかけられ、就寝中は「おやすみ」、一人になりたいときは「あとでね」という表現で意思を伝え、互いに尊重する。洗濯機など共用物を使う際にはボードに使用者の名前を書き込む。風呂場で洗髪をする際はザルを使って落ちる髪を流さないようにする。茜寮や北寮といった二人部屋の場合、先に就寝する人は部屋の電気を消してルームメイトのスタンドをつけるなど。

私はゼミコンパなどで結婚生活に関して質問されると、それは合宿生活のようなもの、毎日が協議と調整の連続だと言ってゼミ生たちを落胆させている。だが、各々約一〇〇名の共同体を機能させている寮生たちに接し、民主的な協議と意思決定はより明確に家庭生活にも導入されるべきだと感じたりした。

五 共生と成長の場

経済のグローバル化と市場競争の激化は大人の生活から余裕を奪い、大人の世界の荒廃は子どもたちに影響を与えている。さまざまな背景を抱えた学生が集まる寮という場で正副寮生委員長たちは何を思っているのか。最後に三寮の正副委

員長の声を紹介したい。

まず、寮で発生する問題である。

例えば、中にはルールを守らない人がいて、破ったら罰当番で済ませればよいと思っていることだという。居室のごみや汚れた食器が片づけられない人もいて、同室者に迷惑をかけることもある。「片づけのできない寮生には（一緒に）片づけをして教えてあげるしかない」そうである。ある寮では共用の冷蔵庫から物がなくなるといふ事件が起こり、出し入れ確認のノートなどの工夫をしたが解決できず、寮生大会で協議をしたうえ、全寮生にアンケートを行った結果、防犯カメラを設置することになった。

また、保護者の態度を問う声もあった。入寮式のあとは寮内で保護者向けの案内があるが、ガイドの指示に従わず勝手に行動してしまう方がいる。また、過保護と思われる方や、心配のあまりいろいろと寮監に問い合わせる方などもあるが、寮が教育と自治の場であることを理解してほしいという。次に、寮監の存在についてである。

かつての「東西寮」時代には、完全な自治を目指すという見地から寮監制の廃止論が出たこともあった。しかし、現在の彼女たちの意見では、寮生が運営する体制だからこそ、中立の立場で寮生に接する「寮監先生」の存在は大きいという。寮監の言葉で救われたことや、自分たちでは気づかないこと

も指摘してくださるそうだ。卒業後も、寮監を慕って訪問するOGも多い。

最後に、寮生活で得られたかけがえない経験について尋ねてみた。皆一様に、寮の友達は特別だと答える。寮運営の苦楽を共にしているし、一緒にお風呂にも入るから。具体的な経験について、二人の話を紹介する。

最初に、寮生活を通じた自分の変化について。

「人生の中で一番成長したと思う。中高ではリーダーシップを発揮し自分に自信があった。しかし入寮後、自分のある振る舞いから同室の先輩に迷惑をかけていた。そのことに自分では気づかず他の先輩から注意され心底へこんだ。けれど、その過ちを改めたら、許してもらえたし、注意を受けた先輩がその後役員に推薦してくれた。自分が間違う人間だと気づいてから人に寛大になった。また、それまで人に注意するのが不得意だったが人に注意できるようになった。こういうことは寮に入らなかつたら気づけなかつたと思う。寮には人のために注意できる人、尊敬できる人がたくさんいる。委員会を動かすのは二・三年生だが、それを四年生が支える。寮の先輩はちよつと怖いほうがよいと思う」

次に、寮の友人との関係について。

「同じ学年の友人が、ある事情で退寮し休学した。でも、彼女が下宿生活を始めると、寮の友人がかわるがわる訪ね、

泊まってきたりしている。ときには寮にも遊びにきてもらう。一緒にご飯を食べに行ったりもしている。ある友人の誕生日パーティーにはお菓子を買ってきてくれた。こんなふうにつき合いが続いている」

教育寮として重要なことは、人間的な触れ合いの中で学生が成長することであろう。そこには、摩擦や問題が必ず発生する。しかし、大切なのは問題を解決する努力である。

六 おわりに

今回、寮生活に接することで、寮とは社会の縮図であることを実感した。また、教室ではわからない学生たちの顔を知ることができた。委員長たちの語り方は頼もしく、すでに教員のそれに近い感じである。ただ、寮生たちが抱える問題が大きくなるにつれ、委員や寮監の負担も増している。大学による心理・精神保健の面での支えを制度化する時期にきていると思われる。

本学では、二〇一五年二月に茜寮が閉寮となり、二〇一六年に開寮する新寮に北寮が移ることになった。新寮は、積極的に留学生を受け入れ、国際交流に貢献するという方針が検討されている。この新寮に自治の文化はどう引き継がれるのか、寮生たちの奮闘を支えていきたいと思う。

「生活の場」から「人材育成の場」まで——進化する「寮」の目指すもの

●特集 国際学生寮 W I S H における人材育成

——早稲田大学中野国際コミュニティプラザ国際学生寮での事例から

葛山 康典 ●早稲田大学レジデンスセンター長・社会科学部教授

一 はじめに

早稲田大学は二〇一四年三月に中野駅（東京都）近くに早稲田大学中野国際コミュニティプラザを設置し、この施設内に国際学生寮 W I S H (Waseda International Student House) をオープンした。定員は八七二名で（男女比おおよそ六・四、学部一・二年生が入居、食事提供なし）、来秋に向けて留学生比率を五〇%まで高めていく予定である。寮費は当初六万三〇〇〇円（水道光熱費、インターネット環境込み）と設定したが、国際化に対する寮生の一層の意識向上と経済負担の軽減を目的とした支援金（寄付金）により一万円を補助し、実質月額寮費を五万三〇〇〇円とした。

オープン以来、テレビ・新聞など多数のメディアで取り上げられていたが、後述する S I (Social Intelligence) プログラムなど特徴的な内容が紹介されているが、その内容はパイロットプロジェクトとして位置づけた田無学生寮（東京都西東京市）での経験によるところが大きい。そこで、本学の学

生寮政策の変遷を大まかに振り返ることから始めたい。

二 W I S H 設置に至る経緯

歴史的に見ると、本学には体育各部の部員が入寮する紺碧寮、短期の交換留学のための学生寮は存在したものの、一般の学生が入寮できる学生寮は、経済支援を目的とした極めて小規模な学生寮が若干存在するだけであった。しかし、二〇〇四年の国際教養学部の開設と合わせ、提携寮の国際学生寮 W I D (Waseda International Dormitory) を設置するとともに、いくつかの外部法人の学生寮とも提携を行ってきた。特に W I D は国際教養学部の学生にとどまらず、多くの日本人からも入寮希望が寄せられ、徐々にその規模を拡大してきた。また、W I D の開設に合わせて、本学で初めて R A (Resident Assistant) を設置し、寮長・寮母及び寮を管轄する学生部との連携を図ってきた経験は、その後の直営寮における R A の活用において貴重な経験となった。

二〇〇八年に田無学生寮が竣工したことは、本学の学生寮





政策の一つの転機となった。旧田無学生寮は一九六一年の建設以来、入寮選考をはじめ、その運営を学生にゆだねてきたが、新しい田無学生寮は建築・運営を本学学生会へ委託する形式となった。同時にこの寮を含むすべての大学直営寮では、新入生のみを受け入れ、入寮期間を二年間とする形態に改め、学生寮が果たすべき役割は、「新入生のスタートアップを支援すること」という位置づけを明確にした。

また文部科学省の新たな社会的ニーズに対応した学生支援プログラム（学生支援G.P.）に、「異文化共生社会で生きる力を養う実践活動」として本学プロジェクトが採択された。

この事業は、国際コミュニティセンターにおける日本人と留学生との交流事業及び学生寮における異文化理解を活動の中心とするものであった。後者の事業では、学生寮が異文化理解をはじめ、学生の成長の場としても機能するように担当教職員を配置し、田無学生寮を運営する本学学生会と学生部の密な連携のも

とで、大学が学生運営に積極的に関与していく体制が整えられた。本学の新田無学生寮の開設時期に、文部科学省からの支援を受けることができたことは非常に幸運であった。

さて当時より、優秀な留学生、そして優秀な地方学生のさらなるリクルートにおいては、宿舍の確保が重要であるという認識のもと、新たな学生寮建設への機運が高まっていたが、二〇〇七年に旧中野警察学校跡地の払い下げが行われ、この地に学生寮を設置することとなった。

同時期には田無学生寮での成果を踏まえた議論によって、学生寮は単なる住居ではなく、学生の成長の場として位置づけることが正式に決定された。この目的を中野新学生寮で達成するため、二〇一〇年に学生部外局として正規学生を対象とする学生寮を管理するレジデンスセンターが設置された。この間、米国を中心に海外の学生寮視察を続けるとともに、国内で先行するいくつかの大学にも見学を受け入れていただいた。ハードウェア面はもちろん、学生寮における学生の成長という視点から得るところが大であった。ご協力をいただいた方々には、この誌面を借りてあらためて感謝申し上げます。

III WISHのハードウェア

学生寮の建設にあたっては、設計段階からレジデンスセンターの意見を取り入れるとともに、早期に中野国際学生寮の運営委託先を決定し、それぞれの経験に照らし合わせながら

建物設備の詳細検討を行った。

中野国際コミュニティプラザには、中野区の要請によって、一階に地域交流施設が設置されることとなり、一階にエントランスホールを設けたうえで、二〜一階部分が学生寮とされた。一階と二階で基本構造が異なることから、一階と二階の間に中間防震装置を設置し、地震に対して約一・五倍の強度をもつ建物が完成した。二〇一四年五月にやや強い地震を経験したが、学生はあまり強い揺れを感じなかったとのことである。留学生はもちろん、阪神淡路大震災、東日本大震災などに遭遇し、地震に対して強いストレスを感じる日本人学生もおり、安心面での効果は大きい。

学生の居室の設計に関して、四人ワンルーム+リビングという基本構造が確認された。さらにユニットにおける個人のプライバシーは十分に確保するという方針が採られた。米国内での視察でも、第一義的には休息の場であることが強調されていた。学生の成長の場としての役割はあるが、寮本来の役割を十分に果たさなければならぬ。そのうえで、個室は必要最低限の広さとした。個室が快適であると、自室にこもりつきりになってしまう恐れがあるからである。

ユニットが共有するリビングをくつろげる場としてデザインするとともに、フロアの共用キッチンなどは開放感のある空間として設計した。什器類についても、後輩が学生寮の歴史を引き継いでゆくという観点から、耐久性の高いものを導入し、長期間利用することにした。このような大変に恵まれ

た環境で生活することによってもたらされるモチベーションアップは非常に大きい。

また建物には、整流フィンによる自然換気システムが導入され、太陽光パネルの設置に加え、電力湯水の使用量をフロアごとに表示する見える化のための液晶ディスプレイが各階に設置されるなど省エネ、エコに配慮した設計となっている。

四 WISHの運営形態

中野国際コミュニティプラザは、地域交流施設と学生寮WISHが設置された複合施設であるため、建物管理及び警備と、学生寮運営の委託をどのように切り分けるかという大きな問題があった。結論からすると、これらの業務を建物一体として委託することで、各業務の連携を強化する方策をとった。警備員、メンテナンス要員などすべてのスタッフが寮生を向いて業務にあたっている。

またWISHには、本学のスタッフが常駐するレジデンスセンター中野分室を設けるとともに、業務委託先のオフィスも併設され、ハウスマスターと呼ぶ住み込みのスタッフが中心となって学生と密に接している。WISHでは、すれ違う学生があいさつをかけ合う姿が定着しているが、背景には前述のような運営形態としようで、スタッフが積極的に声をかけ、学生との距離感を近くする工夫と努力がある。

学生寮で暮らすことを選択した理由はそれぞれであるが、寮生一人ひとりがコミュニティの一員であることを十分理解

して行動することは極めて重要である。これは「言うは易し……」の典型例である。ごみの分別や放置、整理整頓、寮生がひとたび機会主義的な行動をとり、これらを放棄すれば、学生寮の機能は一気に損なわれる。学生寮がどのようなコミュニティであるか。コミュニティのおきては何かを寮生に理解させることは極めて重要である。そのためキーワードは、「管理」手法ではなく、ホスピタリティであると考えた。寮を管理するスタッフの名称として、一般的には寮長、管理人あるいは寮監などという名称が使われてきたが、WISHではハウスマスターとしたこともその一環である。

五 RAの役割

WISHでは、一フロア(定員九一名)に四名ずつ、総計三七名のRAの居住を予定している。彼・彼女らは、RA活動の場として学生寮内に寮室(ユニットバスつきシングルルーム)を与えられている。RAとして活動するのは主に学部三・四年生であるが、一部、主として一年生を担当する二年生のジュニアRAを配置している。RAは大学が選考・任命し、レジデンスセンターと密に連絡をとり、寮生と大学との間をつなぐパイプ役として大きな役割を果たしている。海外ではRAは寮生から羨望のまなざしで見られることが多いが、WISHにおいてもRAの能力は非常に高く、就職活動などにおいて社会から、そして寮生からも高く評価されている。

RAは定例的にレジデンスセンターとミーティングを行う

とともに、自身が居住するフロアのフロアミーティングを主催し、コミュニティの形成、維持発展などにおいて中心的な役割を担っている。また、レクリエーションを主催し交流を促進するのもRAの重要な役割である。

RAは活動を通して自らも大きく成長している。モチベーションが高い学生が機会を与えられているのであるから当然であるとも言える。また、新たなRAを迎えるタイミンングに全員で定期的な研修会を行い、目的を共有するとともに、日々の活動において抱えている問題点や悩みを共有する活動も行っている。

六 S-Iプログラム

WISHにおける最大の特徴はS-I (Social Intelligence) プログラムであると言える。プログラムは、試験の周辺を除く授業期間中の平日一九時から二〇時三〇分まで、WISH内の専用教室で行われている。月々金まで同じ内容の講義が三クラス同時平行で実施され、寮生は自らのスケジュールに合わせて月々金までのどれか一つの曜日にエントリし、義務として参加している。このプログラムへの参加を他のアクティビティとともにポイントとして集計し、個人の達成度合いを把握している。また、WISHにおけるさまざまな活動の活性度を示す指標としても活用している。

S-Iプログラムは、モチベーション系とコミュニケーション系のコンテンツに分類される。どちらも、「真に社会から



求められる人材」を
目指したもので
ある。

前者をSelf Motivation (SM) と呼び、「多様な文化背景・価値観などの中で正解のない問いに答えを見いだす力」を養うことを目指している。クリティカルシンキング、合意形成力など、将来問われる課題に

立ち向かうためには、大学教科で直接的に得る能力とは別の力が必要である。これらの能力は経験によって養われる側面が強い。そこで学生の目標を各自定め、その達成に向けてPDCAサイクル (Plan - Do - Check - Action) を回す過程で、このような能力を養うべく、グループワークを中心に実施している。

コミュニケーション系のコンテンツは英語に限定されているわけではないが、ここでは、英語に特化したGlobal Communication (GC) について触れておきたい。社会では、

国際学生寮で留学生と生活すると異文化理解ができるといった認識が広まっているように思われる。われわれのコンテンツはこのレベルの異文化理解を意味していない。なぜなら、従来の学生寮での異文化理解は「べからず集」の意味合いが強いと考えるからである。寮で留学生と暮らすことで、確かにルームメートの出身国については理解が進むことに間違いはない。しかし、この経験をグローバルに敷衍することが可能であろうか。われわれの答えはノーに近い。なぜなら、「べからず集」には理由がないからである。

GCでは、文化の違いを測るmapsと呼ぶ「ものさし」を用いて、文化の間の距離をさまざまな次元で測定する訓練を行い、国際寮で暮らす自らの経験を通して、インターナショナルな異文化体験をグローバルな異文化理解へと広げるトレーニングをネイティブ講師が実施している。

SIプログラムではこのほか、キャリアアセミナーを実施し、若手のいわゆる「とがった」人材の講演会やパネルディスカッションも行ってきている。教員を目指す新入生が「権力に負けないで、自分の意志を曲げない教師になるためにはどうしたらよいか」と問いかけたことがあった。パネラーの答えは学生の想像をはるかに超えた高い次元であった。その学生の視点が全く新しい高度なものになったことは想像にかたくない。これ以外にも、総合大学の特徴を生かすべく、あるいは共に暮らす寮生の専門領域をかいま見るために、専任教員が専門領域をわかりやすく解説するFaculty Visitも実施している。

学生時代に引き出しを増やしておくことは、将来の財産になるだろう。

本年度からは、協賛企業から若手社員の派遣を受け入れ、主にグループワークのファシリテーターとして、社会人の視点から学生のモチベーションアップのためのアドバイスをいただいている。また、自らが働くことをイメージすることで、学生時代の目標設定をよりクリアにするコンテンツも提供している。

先に述べたようにS I Pプログラムはポイント化されるが、これを含め優秀な学生に、海外でのさまざまな体験を積み機会を与えるアワードを創設した。派遣に際し、渡航費・滞在費の学生負担は発生しない。本人の経験はもちろん、海外旅行では得られない体験談を持ち帰ることで、寮生全体への波及効果を期待している。

このプログラムは、先に述べた田無学生寮で実施した学生支援G Pのプロジェクトに端を発するが、その過程で大幅な改善を行い今日に至っている。S I Pプログラムには大学の単位は付与されない。自らの成長だけが、彼らの努力に対する報酬である。その意味で、コンテンツの質については十分に注意を払っている。

七 おわりに

成長の場としてのW I S Hで中核を担うのがS I Pプログラムである。参加を義務づけているとはいえ、その成否は寮生の

モチベーションしだいである。学生寮における生活基盤としてコミュニティが形成され、自らがその一員であるという環境が整わなければ、このような学生の成長は画餅となろう。

コミュニティの成員となることで、自らと周囲との同質性と異質性を強く認識する。コミュニティが成立するために同質性は必要条件である。一方で異質性は、ときには不快感をもたらす原因になりうる。学生寮は異質性を日常的に受け入れることを求められる環境である。このある種特異な環境に身を置くことは、相手をより本質的に理解するチャンスであるとも言える。多くの日本人学生は、まずは高い意識をもって日本にやってきた留学生のモチベーションの高さに面食らうことになる。そして、彼らの強い主張に伍していくことを迫られる。学生寮でしか得られないモチベーションであろう。

W I S Hでは、ホスピタリティをもって学生に接する一方で、S I Pプログラムで、この困難な環境をプラスに転じるべく積極的にとらえ、受け入れ、より大きな成長に結びつけるための意識変革を惹起している。

今日グローバル人材という用語は、マスコミをはじめさまざまな分野で耳にする機会が多い。その定義が社会の共通認識であるかは疑問である。しかし、グローバル人材の定義を言葉に表すことには、さほど大きな意味はない。W I S Hでは、グローバル人材とはという問いに、自らもって答えとなるべく寮生が日々地道な努力を続けている。

「生活の場」から「人材育成の場」まで——進化する「寮」の目指すもの

特集 ● 多世代との絆を実感できる学生生活

——春日部市官学連携団地活性化推進事業

森田 貴実香 ● 春日部市総合政策部政策課政策推進担当（かすかべ未来研究所）

一 はじめに

春日部市は埼玉県東部に位置し、都心から約三五キロメートル圏と近いことから、東京のベッドタウンとして発展してきたまちである。

本事業の舞台となっているのは、本市の南部に位置し、都市再生機構（UR）が管理する武里団地。入居が開始されたのは今から約五〇年前の一九六六年であり、当時は賃貸団地としては規模が大きく、東洋一のマンモス団地と評されたほどであった。ピーク時は二万二〇〇〇人の人口を誇っていたが、子どもの自立や、持ち家志向の高まりなどにより徐々に人口が減少し、現在はピーク時の半分以下、約九四〇〇人まで減り、活気が失われつつある状況にあった。

このような中、武里団地の人口減少が本市の人口減少の大きな要因である、ということが職員による調査研究の結果導

き出され、その解決策として大学生に団地に住んでもらうという提案がなされた。その後、URや市と包括的連携協定を結んでいる近隣の大学と協議を重ねていき、二〇一一年から事業を開始している。

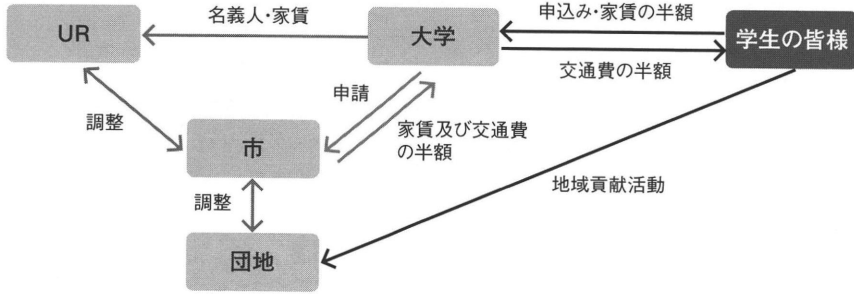
二 地域貢献活動を条件に家賃補助

事業名は「官学連携団地活性化推進事業」。「官」すなわち市と、「学」すなわち大学とが連携して、団地の活性化を進めていこうという事業である。

具体的には、市と包括連携を締結している大学の学生に団地に住んでもらい、団地地域で貢献活動をしてもらうことを条件に、家賃と大学までの交通費の半額を助成している。部屋によって多少異なるが、家賃はおよそ五万円であるので、二人で住んだ場合、一人分は半額の半額、約一万二五〇〇円となる。手続きとしては、まず学生から大学に申請（学内審



図1 事業手続きの流れ



査あり)してもらい、大学はURと契約手続きを結び家賃を支払い、そして学生は半額分の家賃を大学に支払う(図1)。

なお、条件の一つに、二人以上でルームシェアをすること、というのがある。これは、家賃の軽減を図るという面と、同じ意思をもつ仲間同士が協力しやすいようにするという側面をもつ。

現在、日本工業大学、埼玉県立大学、共栄大学の一四人が二、三人でルームシェアをしながら武里団地で学生生活を送っている。

三 貢献活動を通して深まる「絆」

学生たちはまず、入居すると、団地の中央集会

写真1 「ふれあい喫茶」で住民と談笑



所で毎週水曜日に開催されている「ふれあい喫茶」に顔を出し、入居のあいさつをする。「ふれあい喫茶」に集まる住民たちは、孫のような年齢の学生たちを温かく迎え入れてくれ、すぐにお互い打ち解けて仲良くなる(写真1)。

「ふれあい喫茶」は団地の四地区の自治会が交互に運営する住民の交流の場で、毎週水曜日のランチタイムに開催され、毎回一〇〇人を超える参加者でにぎわう。ほとんどが高齢で一人暮らしの人も多く、話し相手を求めてこの場になつたのは、学生が企画した「隣人祭り」がきっかけであった。

住民の約四割が六五歳以上となつてしまつた武里団地。入居学生が団地住民との交流を通じて、地域のお祭りやイベントへの参加率が低くなつていくという実態を知り、これを課

特集 「生活の場」から「人材育成の場」まで

写真2 「隣人祭り」で料理のコツを教わる



題としてとらえた日本工業大学の学生が企画したイベントが「隣人祭り」である。これまでに三回行われ、住民ときょうざや焼きそばなどを一緒に作り、食事を楽しんで交流した(写真2)。

「自分たちで試行錯誤しながら企画したイベントが形になる喜びがある。思っていた以上に住民の方が喜んでくれたりするのはとてもうれしい。お年寄りに元気をあげようと思って企画したのに、逆に元気をもらっている」と学生は語る。

ほかにも、埼玉県立大学で医療や福祉を学ぶ学生は、「ふれあい喫茶」で健康体操を披露したり、共栄大学で先生を目指す学生は、小学校の放課後や土曜日に行う寺子屋を企画したりと、大学の特色を生かした活動を行っている。これらの貢献活動の内容は、決して強制するものではなく、あくまでも学生が主体的に考えて取り組んでいるものである。

写真3 体育祭でパワーを飛ばす



「学校で学んでいることを、実際の社会で生かせるというこの環境はとても魅力的」とほかの学生も語る。

もちろん、地域から協力依頼のあるイベントにも積極的に参加している。体育祭では若いパワーで地区の勝利に貢献し(写真3)、文化祭では力仕事や裏方を担い、地元ですっかり顔なじみとなった学生たちは頼られる存在になっている。現在は、夏祭りに向け、子どもたちにもっと参加してもらえるような新たな「仕掛け」を相談中である。

四 それぞれにとつてのメリット

この事業を通して、市では、にぎわいや魅力向上、武里団地への入居促進を目標としており、この点で言えば、「ふれあい喫茶」への参加者が増えていることや、武里団地の人口

が下げ止まってきていることなどにより効果を実感している。また、学生の活動はメディアなどの注目を浴び（執筆時点でテレビ・ラジオへの露出一六回、新聞などへの掲載三〇回）、確実に武里団地、ひいては本市のイメージアップにつながっている。メディアで取り上げられると反響も大きく、学生や住民たちに誇りが生まれ、さらに活動が活発になるという好循環をもたらしている。

学生にとっては、大学生という限られた期間内での入居であるが、世代を超えた交流の経験を通し、社会へのスムーズな適応能力を養うことができるとともに、その経験が就職活動に文字どおり役立っている。学業との両立もしなければならず大変であるが、ここで経験したものは学生たちにとって必ずや財産となるであろう。

「単なるアルバイトや一人暮らしの学生生活だけでは味わえないようないい社会体験ができています。いろいろな世代がいる団地がいい」という学生の声がそれを示している。学生たちは団地住民の温かさに触れ、武里団地を「第二のふるさと」と感じてくれている。このような声が聞けることは、私たちの喜びでもある。

五 今後の取り組み

学生にとつての学びとまちの活性化を支援する事業。その取り組みの効果の大きさは、学生や住民の声を聞くたびに再

写真4 夕食を食べながら夢を語り合う



認識させられている。学生のニーズも高まっており、行政として今後どのような形で応えていけるかを模索しているところである。

今年度から、学生の発案で、入居学生の「デイナーミーティング」が始まった（写真4）。毎月入居メンバーの誰かの部屋に集まって手作りの夕食を食べながら、貢献活動のこと、学生生活のこと、将来のことなど、自由に語り合っている。今までは、大学ごとの取り組みが中心であったが、今後は入居者同士が力を合わせて行う貢献活動に期待がかかる。

また、イベントなどを行う際、少ない人数を補うために、協力学生を募る動きも出てきている。キャンパスの中だけでは経験できない貴重な体験を多くの学生に提供したい。

今後、UR、大学などと連携を図りながら、さらに多くの学生が参加できるように事業の拡大を図るとともに、学生の活躍の場を広げていきたいと考えている。

「生活の場」から「人材育成の場」まで——進化する「寮」の目指すもの

特集 ● 民間経営の学生寮が 目指すものは

目指すものは

——学生寮に求められる新しい形

金丸 圭介 ● (株) 共立メンテナンス 事業企画部 部長

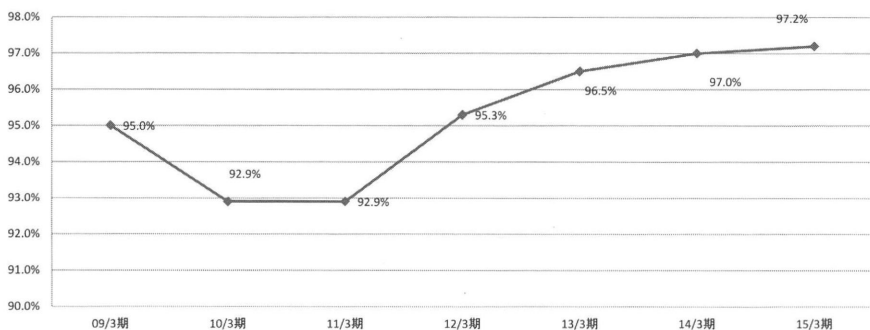
一 はじめに

共立メンテナンスは、学生寮・社員寮事業やホテル事業、保養所・学生食堂・社員食堂などの運営受託、高齢者向け住宅賃貸事業、ワンルームマンション事業、地方自治体の公共サービス受託事業など、食と住のサービスを通じて広く社会の発展に寄与するという経営方針のもとに幅広い事業を展開している。特に学生寮事業は、経営の重要な柱として成長を続けてきた分野である。なお本稿では、登場者の敬称は省略させていただく。

一九七九年にある企業の社員食堂の受託からスタートした弊社は、創業二年目の一九八〇年に学生寮事業を開始した。当時、学校教育法の改正により専修学校が新設され、最初のころは地方から上京した専門学校生の利用が多かったが、しだいに大学生の契約者が増えていき、弊社が管理運営する学生寮の数も増加していった。

二〇一四年四月現在、弊社は日本全国で合計約二八〇棟の

学生会館 期初稼働率実績推移



学生会館（学生寮）を展開している。そのうち「学生会館」は約二四〇棟で、さまざまな大学の学生や専門学校生が混在して入館（入居）している。残りの約四〇棟は、学校の付帯施設としての専用学生会館で、弊社が管理・運営業務全般を学校から直接委託されているものである。

弊社直営の「学生会館」の展開地域は、首都圏が圧倒的に多



学生会館の部屋の一例



く一三一棟に上る。次が関西圏（大阪・神戸・奈良）で三二棟、仙台一九棟、札幌一六棟、名古屋一五棟、福岡一一棟、京都六棟、広島四棟と続き、金沢、甲府、北九州、熊本でそれぞれ一棟ずつ運営している。「学生会館」には男子専用会館、女子専用会館、男女共用会館があり、各館には「ドミミー（地名）」「ドミトリー（地名）」など個別の名称がつけられている。年間の利用者数（契約者数）は約二万人で、弊社が学生寮事業を開始して以来、おかげさまで右肩上がりを続けてきた。「学生会館」という名前も、進学を目指す学生の間で認知度が高まっており、インターネットで「学生会館」を検索する学生も増え、一般的に定着し始めたという実感をもっている。いわゆる旧来の「学生寮」のイメージと一線を画す弊社の「学生会館」を、ワンルームマンションやアパートなどと並ぶ「一人暮らしの選択肢の一つ」と考える学生が多くなっているものと推測される。

学校側にとってみれば、自ら寮を運営する場合に発生する人件費、修繕、維持・管理などのコストや雑務が削減できるメリットがある。さらに、自校の学生

寮として紹介できるため、遠方の学生や海外からの留学生の入館も広く受け入れることができる。今回は弊社の運営する「学生会館」での活動を通して、現代の学生寮に求められている要素を弊社なりにまとめてみたい。

二 プライベートも共有スペースも充実

弊社が創業した一九八〇年前後は、学生寮と言えば建物は古く、部屋は狭くて、その多くが相部屋で一人部屋は少なかった。先輩や友人らが部屋に出入りし、プライベートな空間を確保するのも難しいイメージがあった。また、女子寮などでは門限や規則が厳しく、窮屈な生活を強いられることを敬遠する学生も多かった。

弊社の「学生会館」は、前述の学生寮のイメージとは異なる。居室は個室タイプをそろえ、プライベートな空間を確保し、プライバシーを重視する。外泊なども事前に館長・寮母に届け出をすることによって可能となる。安心・安全を確保しながら、自分らしい自由な学生生活を過ごすことができる。さらに、生活で必要になる机や椅子、照明、カーテンなどの家具・家電はあらかじめ用意されており、布団・着替えと勉強道具さえ持参すれば、すぐにでも生活が始められるようになっている。

館内の共有スペースも充実している。朝夕の食事が提供されるダイニングルームは明るい雰囲気、食事時間以外は大きなテーブルを囲んで友人と一緒に勉強もできる。乾燥機を

備えたランドリールームや、広々とした浴槽でリラククスできるパブリックバス、自分たちで料理を作って楽しめる共有キッチン、会館によってはしゃれた雰囲気の話談室やフィットネスルームを備えている所もある。

こうした共有スペースでくつろぎの時間を一緒に過ごすことで、入館者同士が仲良くなれるだけでなく、社会性が身についてくるといふメリットもある。学科やサークルなどの友人とは、将来目指す方向や趣味、考え方などに共通項があるが、もともと「学生会館」の入館者同士は接点がほとんどない場合が多い。そういう中でお互いに関係を築いていくことで、コミュニケーション能力を自然と養うことができる。

実際に三年ほど前、弊社の「学生会館」に入館する学生と一般のアパートやマンションに住んでいる学生を対象にしたアンケート調査を行って比較分析したところ、「学生会館」入居者は「周りを明るくする力」「心をオープンにできる」が特に高く、女性においては、「負けず嫌い」「敏感に感じとる力」が高い傾向が見られた。交友関係においても「学生会館」の学生のほうが広いという結果が出た。

また、企業の採用担当者に対してアンケートをとった結果、採用の際にこうしたコミュニケーション能力を重視するとの回答が得られた。つまり、「学生会館」のような共有部をもった施設で生活することは、就職にも有利に働く可能性が高いということになる。

このように各自のプライベート空間をしっかりと確保する一

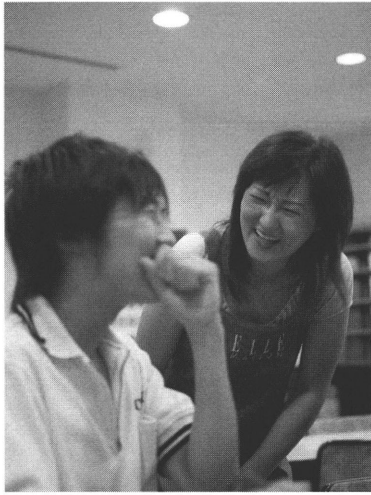
方で、必要に応じて入館者同士でコミュニケーションを図ることができなのが、「学生会館」の大きな特長である。「友人と一緒に過ごす時間は楽しい。でも、一人で過ごす時間も大切にしたい」という、現代の学生のニーズに応える生活環境を実現している。また、閉門時間（門限）は二三時または二四時と比較的遅く、さらには門限の設定されていない会館もあり、サークル活動などにも気兼ねなく参加することができる。

毎月の館費（利用料）は、周辺にある同程度の部屋の家賃相場よりもやや高めの設定になっている。しかし、これには毎日の食事が含まれていて、家具備品も買いそろえる必要もない。これらを考慮するとかえって割安と言える。さらに、次項以降で述べるように、栄養バランスのよい食事が食べられ、安心・安全面でも優れていることから、一人暮らしの学生に対しては、一般のマンションやアパートと比べても、十分な競争力を有していると言えるだろう。

三 手作りの温かさあふれる食事

毎日、規則正しく食事を食べられるのか、きちんとバランスよく栄養をとれるのか。初めて一人暮らしをする学生にとって、またご両親にとって、まず心配になるのが食事の問題である。

「学生会館」では毎日の朝食と夕食を、プロの管理栄養士が栄養バランスを考慮して作ったレシピに従って、寮母が心



を込めて毎食すべて手作りしている。使う素材はなるべく「旬」のものを選び、安全性を吟味して一括大量仕入れを行い、新鮮さを保ったままで各「学生会館」に配送することで、材料コストを抑えている。四季の食材を十分に生かし、毎日食べても飽きがこないように、春夏秋冬の季節ごとに四二食のバラエティ豊かなメニューサイクルが決められている。

メニューは、原則として全国の「学生会館」で統一している。例えば、北海道の会館の夕食がカレーライスならば、東京の会館でも同じくカレーライスが食べられていることになる。ただし、同じレシピに基づいて調理しているにもかかわらず、カレーの味が各会館によって微妙に違っている可能性は高い。なぜならば、実際に作るのは専門の調理師ではなく、あえて寮母が担当しているからだ。家で料理を作ってくれるのはお母さん、という理由である。基本的なレシピは共通だが、最後の

「おし加減」や盛り付けのスタイルなどは、それぞれ寮母に任せている。こうしてなるべく「家庭の

味」「おふくろの味」に近いのも、実家のお母さんが作る、できたての温かい食事の雰囲気味わえることを、何よりも大事にしているのである。

また、日々学生と接する中で、学生一人ひとりの好みや体調に合わせて、味つけなどを調整するのも寮母の役割だ。普段よく食べる学生があまり食欲がなさそうだと「何かあったのか」と声をかけたり、体調が悪そうなときはおかゆを作って食べさせたりすることもある。こうした、寮母の判断によりきめの細かい対応ができることが、弊社の「学生会館」の強みとなっている。

この結果、「学生会館」における朝食・夕食の喫食率（摂取率）は合わせて約八割に達する。これは朝食を食べない若者が増えている中でかなりの高水準であり、それだけ入館者の学生に支持されていることの現れである。

四 安心・安全への対応

大切なご子息を家から送り出したご両親にとって、最も心配になるのが、安心・安全に暮らしている環境かどうかだろう。

「学生会館」では、オートロックつきの玄関や防犯カメラを設置するなど、セキュリティ対策には万全を期している。また、学生がオートロックキーを使って玄関を出入りする間隔をチェックし、四八時間動きがないと館長にアラームがメールで届き、七二時間以上動きがないと弊社の管理担当にも

同時にアラームが届くシステムを導入し、学生の異常を察知できるようにしている。

こうしたハード上の対応策をとることは、もちろん重要である。しかし「学生会館」にとって、学生の「安心・安全」を守る最大の鍵となるのは、実は「館長・寮母」というソフトパワー、人間がもつ力なのである。

「学生会館」の館長・寮母は、住み込みで常駐し、学生たちの世話を行っている。彼・彼女らは全員が弊社の面接を受けて「館長・寮母としての適性がある」と判断されて採用となった社員であり、先輩のところに住み込んで実施研修を行ったり、定期的に開催されるブロック会議に集まった各地の館長・寮母らと意見交換をし合ったりして、経験やノウハウを蓄積してきた。いわば学生会館の寮生活を守る「プロ」と言ってもよい。

その仕事は多岐にわたり、前述したように食事の調理をはじめ、留守中に本人に代わり宅配便の受け取りもする。また、学生が病気になる時には看病をし、おかゆを作り、症状がひどいときは病院まで連れて行く。

ときには学生の相談相手になったり、夜中に過度に騒ぐなど生活態度の悪い学生に注意したり、トラブルの仲裁に入るなど、館長・寮母は「第二のお父さん・お母さん」として、学生にとっては頼もしい存在になっている。

ご両親にとっても、信頼できる大人が子どもそばに居てくれることは非常に心強いものである。また息子や娘の様子

を知りたいとき、急用なのに本人の携帯電話とつながらないときなどに、確実に連絡がとれる館長・寮母がいるということとは、大きな安心につながる。このような「ヒューマンパワー」による「安心・安全」を醸成することは、一般のアパートやマンションでは難しいのではないだろうか。

五 「コミュニケーションの促進を図る

寮生活の魅力の一つが、他の学生とのコミュニケーションである。「学生会館」では、自分とは違う大学の学生や専門学校生と同じ屋根のもとに暮らしており、より広い人間関係を築くことができる。

マンションやアパートではなく、あえて「学生会館」を選んで入居してくる学生には、もともと交流を広めたいという気持ちがある。そのため、通常は問題なく他の学生とコミュニケーションを図り、仲良くなっていく。しかし、中には引っ込み思案な性格の学生もいて、うまく他の学生との関係が築けずに寂しい思いをすることもある。

こうした場合に手を差し伸べるのも、館長・寮母の大切な役割である。例えば、孤立気味の学生に対して、「この人、あなたと同郷で高校の先輩だよ」などと声をかけて、人間関係づくりの後押しをする。そして、そこからは自分でコミュニケーションの輪を広げていくきっかけとなるように見守っていく。このときにあまり押しつけがましくならないよう、学生の性格や個性に応じて、うまく距離感をとることが大切だが、「学

Bowling English



生会館」の館長・寮母はそのあたりの経験やノウハウをしっかりともっている。普段から学生のメンタル面のフォローができるようなるべく学生たちを観察し、必要に応じて適切なコミュニケーションをとることを心がけている。

また、近年は特に外国人留学生の増加に伴って、文化や習慣の違いによるトラブルなども少なからず発生している。その際にも、館長・寮母が中心となってコミュニケーションをとって、誤解を解いたり日本の習慣を丁寧に教えることで解決に導いている。

さらに、弊社主催の「ドリー倶楽部」(寮生の自己啓発と交流を目的としたコミュニティ)で、さまざまな交流イベントも実施している。昨年度の実績を挙げると、英会話講座とボウリング大会を組み合わせた「Bowling English」、英会話講座とお好み焼き教室を組み合わせた「Pancake English」、浴衣の着付け&日本舞踊体験講

座「書道講座」「忍者・くノ一 一日体験講座」を実施した。留学生も多数参加し、国際交流の場としても大いに役立った。

六 これからの学生寮に求められるもの

かつて学生寮は、経済的な理由からなるべく安い費用で利用できる宿舎としての機能が優先だった。それがしだいに世の中の生活水準が上がるとともに、学生寮にも快適さや利便性が求められるように変化してきた。

今後さらに少子化が進み、両親が一人の子どもにかける思いやエネルギーは、ますます大きくなっていくと考えられる。こうした中で、学生寮に求められるのは、学生に対するこれまで以上の「安心・安全」の確保であり、心安らげる快適な生活環境の提供である。また、外国人留学生の増加に対し、国際化への対応も必要である。

そのために学生寮を運営していくうえで大切になるのは「お世話する心」である。栄養バランスのとれた手作りの食事を、温かいものは温かいうちに、冷たいものは冷たいうちに出す、というような基本的な部分はこれからも変わらないし大切にしなければいけない部分だと考えている。そのうえで変化を求められる箇所に関しては、学生やご両親のニーズや要望を的確にくみとって実現していく対応力が必要であり、それを現場で実行し具現化していく人の力、マンパワーが学生寮運営の鍵となっていくのではないだろうか。

「生活の場」から「人材育成の場」まで——進化する「寮」の目指すもの

特集 ● 教育寮「チエルシーハウス」の始まりと未来

山本 繁 ● NPO法人NEWVERY理事長・日本中退予防研究所所長



一 はじめに

私たちNPO法人NEWVERYは、本年三月に教育寮「チエルシーハウス」の第一号を東京都小平市に開設した。

NEWVERYは、大学教育の魅力化や中途退学者の抑制、高校生の進路発見プログラム「WEEKDAY CAMPUS VISIT」の普及を通じた大学と高校生のマッチング改善などに取り組んできた。その活動の中で、大学キャンパス内で行う教育の射程と限界を実感した。具体的には、教育研究は大学が担うが、はたして人間教育（主として学生たちがより良い習慣や文化を身につけること）を大学が担うことは可能なのか。特に私学の教員对学生比では現実には難しいのではなか、そのようなことを考えるに至った。

釈迦に説法だが、人はコンクリートだけに囲まれて育っても人間にはならない。ヒト科の生物にはなりうるが、人がなりうるのは、習慣や文化の習得があつてこそである。

また、大学教育にいわゆる「キャリア教育」が取り入れら

れ始めているのもそのような観点、つまり、教育研究以外の面で大学が学生に対して果たすべき役割がクローズアップされるに至っているからではないだろうか。一方で、学生たちの経済環境は悪化の一途をたどっており、学生寮は学生への経済的支援の側面もあり、注目に値する。

そのようなことを考え、教育寮（学生寮ではなく）の普及に取り組もうという発案が弊会のスタッフ間でなされ、教育寮「チエルシーハウス」は構想された。

本稿では、第一号である「チエルシーハウス国分寺」を例に、そのコンセプト、システムを中心に紹介する。並びに今後の展開を併記する。わずかでもわが国の学生寮の質量両面での発展に寄与できれば幸いである。

二 チエルシーハウス国分寺のコンセプト

「学生時代に、やりたいことを徹底的に」

「未来を知り、自分を創る」

この二つがチエルシーハウス国分寺の基本コンセプトにな



っている。

今日の日本の教育を小学校から一二年間受け、大学生になってそのぜいたくな時間を存分に生かすのはなかなか難しいのではないだろうか。偏差値の高い大学に入るため、将来有名な企業に就職するために学んできた子どもたちが、大学に入って目標を喪失している姿をたびたび目にする。

私は大学時代に学生ベンチャーを立ち上げ、その後、大学卒業時にNPO団体を立ち上げ十数年がたつ。その間ずっと起業家として暮らしてきたが、起業家にも同じようなことが

言える。お金持ちになること、有名になること、偉くなること（権力をもつこと）などがある程度達成すると、その先のビジョンやキャリアが描けなくなる。何のために働いているのか、これからどう生きていけばいいのか、わからなくなり、中には精神を病み、音信不通になる者もいる。

会社を大きくすること、上場すること、お金を手に入れることは何かの手段にすぎない。そうやって得たものをどう使うかが問われている。

学歴や知識、スキルも同様ではないだろうか。小学校から一二年間学び、ついに大学に入った。しかし、大学に入って、それで何をやるのだろうか？ それは何のためなのだろうか？

そのような思いがあり、寮生らがやりたいことを見つけ、「学生時代に、やりたいことを徹底的に」やりきる、そのサポートをする寮が現代に必要なと考えるようになった。

と同時に、大学・大学院時代は働き始める直前。最後の教育機会である。最後の準備機会とも言える。今も激動し続ける社会が一〇年後、二〇年後にどうなっているか誰にも正確に予測はできないが、手がかりはあるだろう。その手がかりから、「自分をどう創っていくのか」考え、行動に移せる場にチェルシーハウスをしたいと考えるようになった。

三 チェルシーハウス国分寺のシステム

コンセプトを具体的な形にするには、そのコンセプトを体現したシステムがまず必要になる。また、システムは寮内文化を形成する重要なツールでもある。チェルシーハウス国分寺は主に以下のようなシステムを採用している。

〈基本設計〉

- ・ 一棟定員五六名。男女二八名ずつ
- ・ 相部屋（一室一九平方メートルを二名で利用）。キュレ

・ターが部屋割りを決定

・門限なし、寮長・寮母不在、食事の提供なし

〈ソフト〉

・教育付加価値に責任をもつキュレーター配置（一名）

・入寮希望者には面談必須（キュレーターが実施）

・五六名の寮生を八名単位でグループピング

・社会人メンターの配置（一六名）

・プログラムの執筆を寮生全員に必須化

〈ハード〉

・業務用キッチン設置

・スタディルーム設置

・フリースペース設置

・アンティーク家具などの設置

・約三〇〇冊の本、漫画を寮生用にセレクトして設置

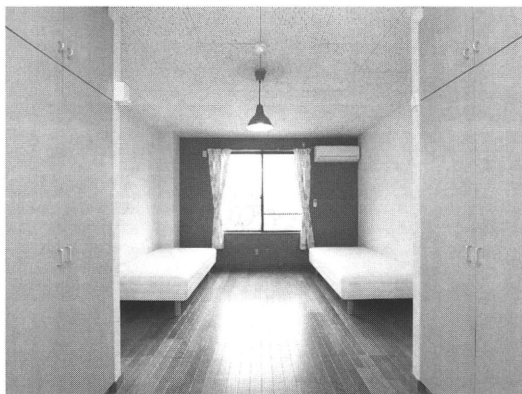
・共有部分に業者清掃を導入

・ゲストルームの設置

以下、順に説明しよう。

〈基本設計〉において、チエルシーハウス国分寺は基本的に大学二年生以上をメインターゲットにしている。近年の学生寮は「男女別、個室、門限あり、寮長または寮母滞在、食事の提供」など、安心・安全を重視したものが多く。それは大学一年生をメインターゲットにしているからだろう。確かに入寮を決定するのは高校三年次。そして、本人の希望ではなく保護者の希望で入寮するケースも多い。できるだけ家庭

居住スペース



意見だった。大学生活が本格化する大学二年次以降、家庭的であることよりも成長を重視するなら、その生活・活動に合った寮設計が望まれる。

チエルシーハウスのコンセプトから考えてみても、「学生時代に、やりたいことを徹底的に」やるには門限は不要であるし、「未来を知り、自分を創る」には異性とも共同生活を送ったほうがよいし（将来働くうえで家庭を築くうえで）、料理も学生のうちに自分で作れるようになっておいたほうがよいと考えた。個室よりも相部屋で人間理解を深められたり（生涯の親友関係に発展することもありそうだ）、コ

的で、安心・安全（見方を変えれば管理しやすさ）を重視した設計がそのタイミングでは好まれる。大学一年生にとつてそれはある意味で合っていると思う。

ところが、大学二年生以上にとつてはどうだろう。「過保護すぎないか」というのがチエルシーハウス構想時に出てきた

コミュニケーション力や協調性を身につけたほうがよいということも。

「そもそも寮生が集まらないリスクは考えませんでしたか」と、複数の方がこれまで聞いてきた。親ではなく学生本人が意思決定できる大学二年生以上を主なターゲットにするなら、募集がうまくいかない不安はあまり感じていなかった。ふたを開けてみても、両親の反対により入寮を断念した学生はいたが、学生は自らの意志でチエルシーハウス国分寺への入寮を希望した。大学選びでも同様だが、親と学生のニーズは異なる。これまでチエルシーハウスのような学生寮が少なかったのは、学生ではなく親のニーズに合わせてわが国の学生寮が発展してきたからではないだろうか、今では考えている。

「男女混合なんて、何かあったらどうするつもりですか」という意見もあるが、男女混合の寮生活よりも、いわゆる一人暮らしのほうが女子学生にはリスクなのが今のご時世である。深夜、最寄り駅で寮生を見つけて寮まで一緒に帰るといったことも日常茶飯事。「チエルシーハウスのほうが安全」が寮に住む女子学生の声である。

〈ソフト〉では、寮長・寮母に代わってキュレーターという職務を設け、スタッフを配置している。キュレーターは、チエルシーハウスの教育付加価値に責任をもち、メンターの発掘・採用、寮内プログラムの企画・実施、寮内の細かいールの設計、寮生への個別のフォローなどを担当する。現在、

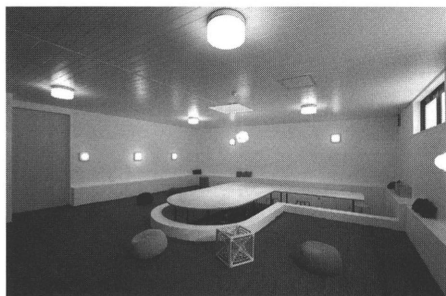
チエルシーハウス国分寺では、大手人材系企業出身で二〇〇名以上の転職・就職支援してきた斉藤寛子氏がキュレーターに就いている。彼女は、教育系NPO「Teach For Japan」の採用・広報を担当後、弊会のキャリア担当フェローに着任し、チエルシーハウスの立ち上げに従事してくれた。

一六名の社会人メンターは、基本的に斉藤氏が発掘、依頼している。すでにそれぞれのフィールドで「やりたいことを徹底的に」やっている二〇代後半から三〇代の方々が中心で、経歴は大企業、ベンチャー、NPO、フリーランス、アーティストなど多岐にわたる。また、特に女性は、子どもを三人出産してITベンチャーのシステム戦略担当に従事していたり、元キャビンアテンダント、離婚経験者、大学教員（医療系大学の助教）など、バラエティに富む。できるだけ多様な未来（ロールモデル）を提示したいという斉藤氏の考えが反映されている。なお、メンターの性別は男女半々である。

メンターは、月に一度はチエルシーハウス国分寺を訪問し、担当するグループの寮生とメンタリングを目的としたミーティングを行っている。大学生生活の過ごし方、サークル・学生団体での活動、就職活動、恋愛など、テーマは人によってさまざまだ。寮生は一六名のメンターから担当を選べることになっているので、寮生も真剣に耳を傾ける。

なお、メンターの人選には力を入れているが、かつメンターを対象にしたメンター研修も実施している。この研修は、大学のファカルティ・ディベロッパーとして全国的に活躍し

フリースペース



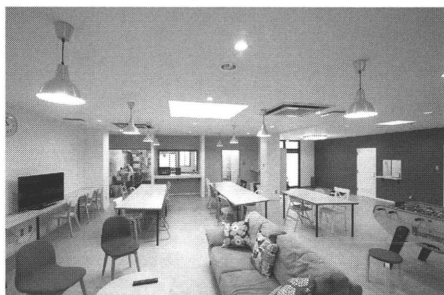
スタディールーム



ゲストルーム



リビング



ている榎栄ひかる氏が担当した。

また、メンタリングをより機能させるために、寮生にはブログを書くことをルールとしている。優れたメンタリングを行うには、メンターとなる社会人は寮生を深く知る必要がある。ただ、定期訪問は月一回。ブログはその間の寮生の活動などを理解する助けになる。メンターは寮生のブログに日々目を通しており、その効果は小さくないようだ。ときには赤裸々なブログもあり、こちらの顔が赤くなるほどだが。

ちなみにメンターは全員ボランティアである。

〈ハード〉は、主としてコミュニケーション量、読書量、学習量の増加を狙って構想している。百問は一見にしかず。写真をご覧ください。

清掃は「学生時代に、やりたいことを徹底的に」というコンセプトから判断し、水回りやリビング、廊下など共有部分にのみ業者を入れることにした。時間は有限だからである。

ハードにおける最大の特長は、ゲストルームの設置である。もともとは管理人室である。その部屋を一泊一〇〇〇円のゲストルームとして運用している。定員は五名。現在は寮生の直接の知り合い（友人、家族など）とメンターが利用できる。

寮に住む学生のほとんどは非関東圏出身である。地元の友人が研究、学生団体、インターンシップ、就職活動、旅行などで上京する際、宿泊を勧めているようだ。友人が泊まりに来る寮生は、その友人の情報を寮生限定の「F2田（ソーシャルネットワークワーキングサービスの一つ）」に流し、「話したい人

ワークショップの様子



も気軽に泊まれる環境があるのは助かるようだ。

四 今後の展開

以上、簡単にチエルシーハウス国分寺のコンセプトとシステムを紹介してきた。まだオープンして数カ月、これから日々PDC Aサイクルを回しながら、まずは教育寮として質的な発展を遂げていきたいと考えている。

実は弊会は二〇〇六年から約八年間、若手漫画家を支援する「トキワ荘プロジェクト」という活動も行ってきた。現在

は夜〇時にリビング「集合り」とやっている。都内に住む同じ大学の友人や寮生の家族が泊まりに来ていることも多く、このように人間関係（社会関係資本）が広がっていったり、家族ぐるみの付き合いに発展したりするのもチエルシーハウスの魅力の一つになっている。平日忙しいメンターにとって

は東京・京都の古民家を二十数軒借り上げ、約一三〇名の若手漫画家を支援している。そこでの経験、気づきを踏まえて始めた「チエルシーハウス国分寺」だったのであり、住まいをベースにした若者の成長の場づくりにはある程度の専門性を有していると自認していた。ところが対象・コンセプト・システムが変わり、毎日が学びと気づきの連続。やってみなければわからないことばかりだということを痛感している。量的な拡大に入るにはもうしばらく時間が必要だ。

一方で、今回教育寮というものを自ら運営し、海外の大学が寮教育を重視してきた理由が何となくわかった気がした。寮にはすばらしい可能性がある。それはおそらく間違いない。二〇一五年以降、チエルシーハウス国分寺のようなインターカレッジの教育寮、特定の大学専用寮の運営受託、それから高校の寮運営にも取り組んでいきたいと考えている。実は、インターカレッジの教育寮以外は外部からお声かけいただいたもの。自分たちではそのような可能性はまるで思いつかなかった。

幸いこのように高校・大学関係者の方々に注目・期待していただいている。そのことを今後の活動への活力とし、あるべき未来を生み出していきたい。

本稿を最後までご拝読いただき、感謝申し上げます。ぜひ、チエルシーハウス国分寺にいらしていただきたい。教育寮というフロンティアを共に味わい尽くし、荒野を切り開くことができれば望外の幸せである。